Title	序：あらためて「近代とは何か」という問い
Author(s)	大木，英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.21, 2001.9：3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4100
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

序　――あらためて「近代とは何か」という問い――

聖学院大学総合研究所所長　大木英夫

エドマンド・バークは『フランス革命についての諸省察』の中で「歴史の悪用」を厳しく断罪する。もちろん彼は、歴史が教える「人類の過去のあやまちと弱点とから、未来の知恵の材料をひきだす」ことを否定しない。しかし、歴史は「悪用されれば、武器庫として役立ち」、「攻撃と防御の武器を供給し、不和と敵対を継続させたり復活させたりする手段を供給し、市民的憤激に燃料を注ぐ」と指摘する。ヴォルテールの『歴史哲学』（安斎和雄訳）を読んで、このバークの言葉を連想した。バークはこう断言する。「われわれは、ルソーへの改宗者ではない。われわれはヴォルテールの弟子ではない」。そして、フランス人は、「ローマ教皇の無謬性の盲従的信仰」をいまや「哲学者たちの独断へ敬虔かつ盲従的な信仰」へと変えているという。ヴォルテールやルソーへの改宗ということを揶揄しているのだろう。バークは、この言葉を振りかざして、イギリス革命とフランス革命との連続を一刀両断する。

バークは、この書において、リチャード・プライスと対立している。この対立が興味深い。プライスはピューリタニズムの系統であり、そして、イギリス革命をフランス革命へとむすびつけて捉えよ

うとしている。しかし、フランスに対して、バークはこう言う、「あなたがたの間で行われていることは、イングランドの例に倣っているのだと、ときどきフランスで表明されるのを、わたしは聞く。わたしは、断言させていただきたいのだが、あなたがたがやったことのほとんど何ひとつとして、出来事の行為においても精神においても、この人民の習慣や支配的な意見から、出ているものはない。われわれは、自分たちが、フランスに決して教えたことがないのと同じように確実に、これらのことをフランスから学ぶつもりはない、ということをわれわれは付け加えたい」。

＊

「近代とは何か」の理解において、きわめて微妙な分岐点がある。それは世界史の動向の問題と正しく取り組むために、特別な関わりをもっている。そこでどう理解するかは、世界史の過去と現在とをどう未来へと方向づけるかと直結するからである。

本研究所は、十六・十七世紀の研究にこれまで重点をおいてきた。宗教改革の流れを、カルヴァンからピューリタニズムへと辿ることによって、世界史の動向をあらためて見きわめようとする努力であった。もちろんそれは「近代とは何か」という問いを意識しながらなされた研究であった。しかし、この問いは、そのあとに続く十八世紀、十九世紀を無視して、二十世紀へと飛躍することでは、正しく捉えることはできないことは言うまでもない。セイバインの『デモクラシーの二つの伝統』という研究がある。それは、イギリス革命とフランス革命との違いを明らかにしている。セイバインはピューリタニズムから派生した運動ディガーズの指導者ウィンスタンレーの著作の編集者であった。その知識が、この違いを識別するセンスとなったと思われる。

イギリス革命からアメリカ革命への関係も、さらに緻密な分析と解釈を必要とするであろう。バークの視点は、そのかかわりで、同意するか否かは別として、われわれに参考になることはたしかであ

る。バークのセンスは、すくなくとも、プライスがピューリタニズムを啓蒙主義への方向に短絡直結させる傾向にたいして、われわれの見方にバランスを与える。焦点は、ピューリタニズムから啓蒙主義へという方向づけの是非の問題へと収斂するであろう。バークは、「もっとも啓蒙的で自由な」時代に、「われわれが一般に、教育されぬ感情の持ち主であること、われわれが、自分たちの古いプレジュディスを、すべて投げ捨てるかわりに、それらをたいへん大事にしていること、さらにはずかしいことには、われわれは、それらが永続し普及すればするほど、われわれは、それを大事にすること」を、敢えて告白する。これはアイロニカルな言い方であるが、ピューリタニズムを啓蒙主義へと短絡することを抑止する位の効果をもっているように思う。その関連で、ヴェーバーが洞察した、ピューリタニズムの中にみた合理主義が、啓蒙主義的合理主義と違うことを、見る必要もある。

*

この夏、所用でジュネーヴのエキュメニカル・センターに行った。一九六六年そこで開かれた世界教会会議「教会と社会協議会」に出たときの思い出がよみがえる。その建物はフェルネ通りと呼ばれるなだらかな坂道の途中にある。その道を更に行くと、フランスに入る。その最初の町は、フェルネ・ヴォルテールと呼ばれる、ヴォルテールが市長をした町で、中心にヴォルテールの銅像が立っている。その道を逆方向にくだりパレ・デ・ナシオンのそばを通ってジュネーヴの中心に向かうと、ローヌ河の流れ出すあたりにはルソーの銅像がある。そしてさらに旧市街の丘の上には、カルヴァンの宗教改革のサンピエール教会が聳えたつ。「近代とは何か」という問いが、その道すがら浮かんでくる。ヴォルテールの『歴史哲学』とバークの『フランス革命についての諸省察』は、今夏、帰国して真っ先に、あらためて読んだ。